

〔時論〕

## 韓国問題キリスト者緊急会議を批判する —— 光州事件をめぐるニセ文書をめぐって ——

西 岡 力

はじめに

最近、日本の福音派クリスチャンの中で社会的責任に関する関心が高まってきている。ローザンヌ宣言における問題提起を受け、J E Aの中でも様々な議論があるようだ。福音派の新聞である『クリスチャン新聞』も、折にふれて政治、社会の問題に関する教会・クリスチャンの取り組みを報じている。湾岸戦争の際には、多国籍軍に対する日本の協力などをめぐり福音派内部でも多くの議論が交わされ、一部では声明発表やデモ行進という形での運動も見られた。

このような状況に対して、筆者はある危惧を持っている。社会問題への積極的な取り組みという点では、NCC系の教会・クリスチャンがかなりの活動をしてきている。筆者の専門分野である韓国・朝鮮問題でもNCC系団体の活動は多くあった。その活動が参加者たちの主観や願望とは大きくかけ離れた役割を現実政治の中で果してきたことを筆者は目撃してきた。言いかえると、クリスチャンの活動により問題の解決が逆に遅らされるばかりか、新しい問題さえ生み出してしまうというケースが多々あったのだ。

原因はいろいろ考えられる。一つには、一般的にクリスチャンがナイーブであって、自分たちが支援しようと考えた政治グループを無原則で信じ過ぎてしまう傾向が強い点が挙げられるだろう。現実の政治の中では、各々のグループが権謀術数を巡らせて自己の主張を実現させようと動いている。目的を実現するためには嘘をつくことなど何とも思わないという人間が、政治的立場に関係なく存在する。人間の原罪の表れともいえる自己中心性は、一見「被害者」と見える人たちの中にもある。

本稿は、1980年5月に韓国で起きた光州事件をめぐる日本のNCC系団体の活動が、結果として日本社会に虚偽を広め、韓国・韓国人の名誉を著しく傷つ

けていった経過を明らかにすることを目的としている。「クリスチャン」という名の下で行なわれた社会問題への参加が、非キリスト的な結果を招来してしまったこの例から、私たち福音派が社会問題にどのように関わっていったらいいのかを考える材料が得られれば幸いである。

## 1. 光州事件と「引き裂かれた旗」

光州事件の概要は次の通りである<sup>1)</sup>。1980年5月17日、全斗煥国軍保安司令官（後の大統領）らが、前年10月の朴正熙大統領暗殺後、各地で多発していたデモ等を抑えるため非常戒厳令を全国宣布し、国会を解散すると同時に、金大中氏らを逮捕した。大学の構内や市内の主要地点には軍部隊が配置され、全国的に展開していたデモは姿を消したのだが、金大中氏の地元全羅南道光州市だけで学生らが戒厳軍と衝突し、流血の事態となった。当初投入された特戦団兵士の鎮圧方法がかなり手荒であり、「慶尚道の軍人が全羅道人を皆殺しに来た」などという悪質のデマが広がったこともあり、学生らのデモに多数の市民が合流し、その中の一部が武器庫を襲って武装し軍と銃撃を交える事態となり多数の死傷者が出る中、軍が一度光州市内から徹収する。その後、27日に軍が再突入し鎮圧される。当局は同事件を金大中氏らが政権をとるために事前に計画していた内乱陰謀であるとして、金氏らを軍法会議にかけて有罪とした。死者は193名と発表された。（なお、その後の事件をめぐる動きについては後述する）。

事件直後の同年6月5日、日本カトリック正義と平和協議会が記者会見をして「引き裂かれた旗——あるキリスト者の目撃した証言」と題する文章を公表した。現地から届けられたものだといわれる同文書（以下「旗」とする）は、たいへん衝撃的な内容のものであった。1974年1月以来、韓国キリスト者の民主化斗争を支援し日本の対韓政策を改めさせることなどを目標として活動を展開してきた、韓国問題キリスト者緊急会議（代表中嶋正昭、事務室をNCC内に設置<sup>2)</sup>）もその機関紙『韓国通信』第56号（同年6月20日発行）に「旗」を掲載し、その内容を事実であるかのように扱った。

「旗」は、光州事件を目撃した一キリスト者が自身の見たことを証言する形式で書かれている。「旗」の筆者は、事件が始まった日の翌日である5月19日に光州に入り、24日に歩いて光州を脱出したと書いている。

その「目撃証言」の中で特に注目されたのは次の二つの点だ<sup>3)</sup>。

第一に、デモの鎮圧に投入された戒厳軍が老人や女子大生らが無差別に虐殺した場面を目撃したと伝えている点だ。

「男女、老若、学生、一般市民の区別なく手当たり次第に殴られ、刺され、打ちのめされた。(略) この時、私の眼は恐ろしい現場を捉えた。まだ避難できずにいる七十歳くらいの老人の頭に突挺兵の鉄槌が降ろされたのだ。老人の口と頭から噴水のような血がほとばしり出、悲鳴をあげるひまもなく老人はそのまばたたと倒れた。」

「二人の空輸兵に犬みたいに引きずられてきた女の人は臨月に近い妊産婦であった。『この女、袋に入っているものは何か。』私は何を問うているのかわからず、その女の人の手を見つめたが、手には何もなく、何かを入れることのできるような袋も見えなかった。

『この女！ 何も知らぬか？ 男の子か？ 女の子か？』

横にいた奴がせき立てているのを見て、私ははじめて何を言っているのが判った。女の人の言っている声は聞き取れなかったが、女の人も何を言われているのか判らないという素ぶりであった。

『それでは私が判らせてやろう。』

瞬間、女の人が反抗する間もなく着物をつかむや引き裂いた。女の人のワンピースが引き裂かれ、肌が見えた。空輸兵は帯剣でその女の人の腹をぐさっと刺した。剣を刺すとき、ねじって刺したのか、すぐに腸がとびだした。彼らは再びその女の人の下腹を剣で刺し、腹を引き裂き、胎児を出して、うごめいている女の人にその胎児を投げつけた。

とうてい信じることもできない、あり得ようもない、この悲惨極まりない現場を目撃した人びとは、皆同じように首を横にして身ぶるいしながら歯ざしりした。私は目を閉じ、唇をかみしめた。全身にけいれんが起こり、再び目をあけた時には、死体も兵士もその場から消え失せていた。横に立っていたおじさんの話によれば、あたかも汚物をはき出すように、かますの中に押し込め、清掃車に投げ込んでいったとのことである。」

「ある路地裏を抜け、大通りの前で私は踏みとどまってしまった。ほとんど反射的に身を空き箱の後に隠した。(略) 女子大生と見える三人の娘さんが空挺兵によって徐々に裸にされていた。ブラジャーとパンティまでを全て裂き、その中で最も悪辣に見える兵士が軍靴で娘を蹴とばし、『早く消え失せ

ろ！ このアマども、今がどのような時であると思ってデモンカシでかすのか』、怒り狂う狼みたいに言った。しかし、処女は逃げるのではなく、共に胸を押え道ばたに座りこんでしまった。私は彼女達が早く逃亡することをどれほど切に願ったか知れない。しかし、この私の思いに反して娘たちは、地べたに座ったまま動こうとしなかった。この時一人が叫んだ。『この女ども、生きるのが嫌なようだ、それなら仕方ない。』その瞬間、娘たちの背中には帯剣が同じように刺され、噴水のように血がほとばしった。倒れた娘たちの胸を帯剣でX字を書き、生死の確認もなく清掃車に投げこんでしまった。闇埋葬をするのか、火葬にするのか、それは知る由がない。』

第二の点は、死者の数に関して当局が発表した193名をはるかに上回る死体を目撃したと伝えていることである。

「すでに戒厳軍が退却した道庁は廃墟の都市、軍靴のように殺伐とした敗戦の都市の姿をあらわした。(略)

道庁の地下室には顔も見分けられないほど火災放射器に焦がされ裂かれた死体が475体も放置されているのを見た市民たちは、再び憤りで歯をふるわせた。」

引用しているだけで胸が苦しくなるような内容だ。「旗」が韓国から届けられたことは間違いないだろう。日本カトリック正義と平和協議会が発表したものと、『韓国通信』に載せられているものを比較すると、一部に翻訳上のちがいで生じたと思われる語句、表現の差があるので、原文は韓国文であったことも確かであろう。前記引用部分に「闇埋葬」（遺体を秘密で埋葬すること）という韓国語では一般的に使われるが日本語としてはこなれていない漢字語が使われているのもそのためであろう。（カトリックの発表した文書では「人知れず埋葬」という表現に訳されている。）

しかし、手元に届いた文書をそのまま信じるかどうかは、受け取った例の判断と責任の問題だ。日本カトリック正義と平和協議会と韓国問題キリスト者緊急会議は、各々の判断と責任の下でこの文書の伝える内容を事実と認め日本社会に公表したのである。大手マスコミは前者の記者会見をほとんど伝えなかった。特に後者は発行部数3,000部といわれる機関紙で「旗」を印刷し、大いに広めたわけだ。

「旗」がクリスチャン団体によって日本社会に公表された結果、ある政治・社

会的効果が生まれた。後述するようにある政治勢力がそれを使って反対勢力を大いに攻撃したのだ。そして、大方の日本人は従来から持っていた「韓国は恐い国」だという先入観をより強化させられた。そのような結果が、本当にクリスチヤンの社会的責任という点から望ましいものであったのかを考えていきたい。

## 2. 「旗」をめぐる論争

光州事件が起きた当時、日本においても同事件の性格をめぐり鋭く対立する見方があった。その対立は極めて政治的な立場の違いを背景に持つものだった。

第一の見方は、事件の原因を野党政治家・金大中氏が権力奪取のために計画していた内乱企図にあるとするものだ。当時の韓国政府はその立場から金大中氏らを逮捕し軍法会議にかけた。死刑にされるという見通しもあった。民団と一部日本人がこれを支持した<sup>6)</sup>。

その対極に、全斗煥將軍らが自分たちが権力を握り続けるために「全国民を相手に戦争を(した)」<sup>7)</sup>のが光州事件であるという見方があった。こちらのグループは「金大中氏らを殺すな」という運動を大々的に展開した。北朝鮮を支持する朝総連、社会党・総評などと、北朝鮮への評価を留保しつつ韓国政権に反対する文化人・市民グループの両方がこの立場で一致していた。韓国問題キリスト者緊急会議もこの立場からかなり活発に動いていた。

「旗」はこの立場の人たちが全斗煥政権を非難・攻撃するとてもよい材料として用いられた<sup>8)</sup>。光州で市民を虐殺した全政権が、金大中氏をも殺そうとしている、というキャンペーンは、当時の日本でかなりの共感を集め、マスコミも大きく取り上げた。

「旗」以外にも①戒厳軍の虐殺、②発表を超える死亡者、の二点を伝える文書がいくつか出回り、「旗」の証言を補強した。やはりその文書も韓国問題キリスト者緊急会議の『韓国通信』で発表されたものが多い。一方、韓国政府は、事件当時様々な「流言飛語」が流れていたことは認めたが、それはすべて事実無根だという戒厳司令部発表を出し、「旗」等の証言を全面否定した。「旗」などの文書は韓国内で一切報道させなかった<sup>9)</sup>。

事実か否かが争われていた「流言飛語」の内容を、戒厳司令部発表と、日本に伝えられた「旗」等の文書によって整理しよう。それは大きく分けて三種類あった。

第一は、投入された戒厳軍兵士の性格と状態に関するものだ。すなわち、慶尚道の人間だけが選ばれた、食事が与えられていず、覚醒剤入りの酒を飲まされていた、等である。

第二は、戒厳軍の取った残虐な行為——「虐殺」についてである。その犠牲者としては、妊婦、女子学生、全南大生、中央女子高生、老人、警官、タクシー運転手等が挙げられていた。

第三は、死亡者の数に関してだ。5月18日に40人が殺された、22日までに200余人死んだ、23日に道庁の地下室で475体の遺体が確認された、或いは推定死亡者数として800～1,000人、2,000人、10,000人近くと言われていた。

以上の真偽が争われた「流言飛語」について、表1でその概要とそれが掲載されている資料についてまとめた。

虐殺した死亡者数に関する「旗」などの証言に関して、韓国政府とは違った立場からの疑問提起があった。佐藤勝巳（日本朝鮮研究所事務局長・当時）は月刊『朝鮮研究』1980年7月号で「旗」に関して

「ここで指弾されている空挺部隊は、特殊の訓練を受けた部隊なのかも知れないが、韓国の農民や労働者（徴兵によって）で作られた部隊の一つであることは動かし難い事実である。しるされていることが事実なら、韓国の農民や労働者は、一たび単に組織され、上官に命令されれば『吸血鬼集団』化する民衆ということに論理的にならないだろうか。民衆の主体にそくして考えた場合、たんに命令した人たちがわるいなどでは、済まされない深刻な問題を内包していよう。

またこのレポートが、事実を誇大にしるしたもの、あるいは『UB通信』（事実無根の流言飛語のこと。西岡補）に属するものであれば、報告者は、自民族を貶しめ、愚弄しているのであって、その責任は重大といわねばならない。他方、韓国の民主化の運動に連帯したいと考えている一部日本人や在日朝鮮・韓国人は、この報告が、真実であるとして、自分たちの機関誌紙にとり上げ紹介している。この人たちの認識には、韓国では、このようなことが容易に起こりうるという前提があるのであろうか。

これは『韓国はこわい国だ』という多くの日本人のもつ、韓国認識と選ぶところがないのではないか。もっと慎重であって欲しいと思う。」

この問題提起を受けて筆者は当時、光州事件に関する日本の新聞の記事を検

表1 真偽が争われている『流言飛語』

[illegible]

① ② ③ ④ ⑤  
出所：①『韓国通信』55号 ②,③ 同56号 ④『世界』80年7月号,8月号(岩波書店) ⑤同8月号  
(拙稿「日本の新聞が伝えた光州事件」『朝鮮研究』80年8月号より)

討してみた<sup>8)</sup>。朝日、毎日、読売、日経、サンケイ、東京の六紙を対象にした。事件当時、韓国に特派員を置いていた日本の報道機関は、朝日、読売、日経、サンケイ、東京、の新聞5紙と、共同、時事の通信社2社である（テレビは除く）。また、日本の新聞が使った外国通信社は、AP、UPI、AFP、ロイターであった。各新聞の光州発記事などより調べた光州現地取材状況は表2の通りである。

光州の市民学生は事件当時、外国人記者に対してたいへん協力的であった。

表2 光州市内の特派員取材状況（推定）

	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
朝日(齊 藤)		○	○	○	○	○					○
読売(支局員)									○	○	
東京(山 崎)							○	○			
共同(鈴木他)		○	○	○	○		△	△	○	△	○
AP		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
UPI		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ロイター					○	○	○	○	○	○	○
AFP				○	○	○	○	○	○	○	○
日経	(ソウルにて取材)										
サンケイ	(                    )										
時事	(                    )										
毎日	(ソウル支局閉鎖中)										

(△は光州郊外の長城)

(拙稿「日本の新聞が伝えた光州事件」『朝鮮研究』80年8月号より)

国内マスコミが戒厳令下に検閲を受けておりまったく自分たちの主張を書いてくれなかったことへの反動もあって、外国マスコミを使って自分たちの主張を外に伝えようとしたからだ<sup>(9)</sup>。戒厳軍側も外国人記者が光州市内を出入りして取材することを、鎮圧が終了する日まで許している<sup>(10)</sup>。

各新聞の光州事件記事の内容を焦点となる虐殺と死亡者の数についてみる。第一に「旗」が伝える無差別の虐殺を目撃したり、目撃者の証言を得た特派員はいない。ただ、現地でそのような「流言飛語」が流れ市民をより激昂させたという事実は各紙が伝えている<sup>(11)</sup>。

朝日の藤高、住谷両特派員はソウルからの記事の中で、「戒厳軍が女子大生の乳房を剣でえぐりだして市庁前にさらした」「生徒を殺された学校の校長が抗議したら殺された」という「流言飛語」について、はっきりと「デマ」であると断定し「計画的な扇動という見方もできる」と書いている（朝日5月28日）。

一方、朝鮮総連の日本語機関紙『朝鮮時報』は6月2日と6月26日付で東京新聞と朝日新聞からの引用という形で虐殺は本当にあったと書いた。ところが東京も朝日もそんなことは一切書いていないのである。悪質な情報工作と言わざるを得ない<sup>(12)</sup>。

第二に死亡者の数である。当時光州市内にいた外国人記者は、政府が発表した死者数<sup>(13)</sup>よりも多くの死者を確認できれば世界的スクープになることから、病院や体育館など死体が安置されているところを歩きまわってその数を確認していた。信頼できる数字として報じられたのは次の通りだ。



光州5月22日発A P（読売23日）市内の4つの病院で死者57人（ほとんど市民、学生）を確認。ソウル23日発時事A F P（読売23日夕、毎日23日夕）とソウル23日発藤高特派員（朝日23日夕）は133人（4つの病院に81、道庁に52の遺体がある）。ソウル26日時事（サンケイ27日）は160人（46人仮埋葬、100人近くが道庁、病院に）。ソウル26日発藤高特派員（朝日27日）と光州27日U P I ジョン・ニーダム記者は、政府高官筋の情報として127人だとしている。

即ち、「旗」が伝えるような、23日に道庁地下室にあった475体の遺体を市民が道庁前広場に並べた場面を目撃した外国人記者は一人もいないのである。23日には各紙とも必死になって遺体の数を調べていたにもかかわらずだ。

筆者は日本の新聞の報道を比較検討してみると「旗」の伝える戒厳軍の虐殺と500人近くの死者確認は、かなり疑わしいという結論を得、それを活字にした（『朝鮮研究』80年8月号）。日本の新聞が「旗」を一切引用していないのも、信ぴょう性のなさのためといえるだろう。

しかし、キリスト者緊急会議はそれに対していっさし反論をしないまま、光州事件は地元出身者を除外し幻覚剤を飲まされていた軍人による無差別殺りくであり<sup>(14)</sup>、死者は2,000人にのぼる<sup>(15)</sup>という主張を機関紙などを通じて継続して広めていった。

### 3. 暴かれた「旗」の虚偽

筆者はその後、光州現地に6回入るなどして「旗」の信ぴょう性に関する追求を続けた。その結果、「旗」の内容を否定する次のような証言を集めることができた。

第一に妊婦の腹を裂くなどという虐殺が本当にあったのかについてだ。83年5月、事件当時全南大学1年生で銃を取って闘ったという学生は「たしかにそういうウワサはありました。でも、自分も、自分の周囲の人間も、だれもそれを確認してはいません。だから、どちらとも言えないですね。私の見た一番残酷な場面は、中年の婦人が頭をこん棒でなぐられているところです。」と証言した。

同じく、83年5月光州で会ったタクシー運転手も「『旗』の伝えるような虐殺は目撃していない。大学の近くで談笑していた学生を軍人がメチャクチャになぐりつけて連行して行くところは目撃しました。」と語っている。

第二に死亡者数に関してだ。先の学生は、「旗」が見たという475体の遺体に関して

「あの時、自分は仲間たちといっしょにその集会を組織する側にいました。そこで犠牲者の数を確かめようとして、並べられた遺体を数えたのです。その時確認できたのは50余体でしたから、475体という数はおかしいと思います」と断言した。

84年5月ソウルの延世大学図書館前に、「旗」が全文壁新聞となって掲示されていた。雨にぬれないように模造紙の上に透明なビニールがはられていた。道庁の前に475体の遺体が並べられた、という問題の部分を見ると、そのビニールの上から万年筆で「ウソだ！ その時おれはそこにいたが、遺体はリヤカー3台分しかなかった」と書かれてあった。

85年から韓国のマスコミ、国会も光州事件の真相に関する調査を次々に公表してくる。

『月刊朝鮮』85年7月号は、当時光州市内を取材した朝鮮日報記者の座談会が掲載されている。そこでは当時広く流れた「流言飛語」に関する取材の結果、それらはすべて事実無根であったと証言されている。

「――妊婦を刺して殺した後胎児を引きずり出したという『流言飛語』もありましたね。このウワサの根拠を捜してみました。そうしたらデモを見物していたある婦人が驚いてしまったため流産したことが誤って伝えられたのです。とにかく流言飛語は事実として確認されていません。

――その事件に関してはこのような事実もありました。全南高校教師である夫を迎えに出た婦人崔美愛（音訳）氏が流れ弾に当たって死亡し、実際にその夫人は妊娠8カ月だったのです。記者もその夫人が銃傷で死亡したことを確認しました。

――女性の乳房をえぐり出したという話はどのように始まったのですか。

――たぶん軍人たちが若い女性を乱暴に扱ったところが発端になったと思います。実際に乳房をえぐり出された場面や、そういう死体を目撃したという人間にも会えなかったですし、そのような死体も確認できませんでした。（略）

――とにかく私たち取材チームもそのウワサを確認しようと一生懸命動きまわりました。六名の取材陣が分担して各病院を訪れましたが確認できません

でした。(略)

——妊婦の話はそうだとし、地域感情を誘発させたり、軍人が酒を飲んでいて、飢えていた軍人を先頭に立ててデモを鎮圧したという話はどう見えますか。

——最近、機動隊員一人と前空挺部隊出身除隊軍人に会いました。機動隊員は光州事件当時、道庁の中で空挺部隊軍人といっしょに鎮圧作戦をした人です。彼らの言葉を総合してみると、酒を飲んでいたりとか、慶尚道出身軍人だけで編成した部隊だというのはデタラメだと考えられます。その時投入された軍人の中で全羅道出身が多くいたというのです。しかし、食事を与えなかったということは一部の場所で事実であったことが確認されました。旅団本部であったある大学から給食車が外に出ようとしてデモ隊に攻撃を受け、食事の供給ができなくなりました。そのため2日間非常食料で飢えをしのいだというのです。

——市民たちは『お前たちのために我々は十日間も食事ができなかった』などという戒厳軍の不平をデモ現場で多くきいたのですが、先の話はそれが多少誇張されて伝わったものと見られます。

——流言飛語が乱れ飛ぶしかなかった理由の中でもっとも重要なことは、言論不在状況であったという点を挙げることができます。光州一円で起きた事件の報道が統制されるや『UB通信（流言飛語のユービーをとったもの、西岡補）』が威力を発揮したのです。流言飛語を確認するために直接現場に行ってみると、ウワサは大げさに伝えられたデタラメであるということが多かったのです。とにかく流布されている話はいつも大きくなっていくのです。それだけ言論の役割が重要だということを実感をもって教えてくれたのが光州事件ではなかったかと考えられます。結局、言論統制で損害を受けたのは誰だったのでしょうか。今となっては、流言飛語を流言飛語だといっても信じない人たちが多いのです。『狼と少年』の状況になってしまったと思います。」  
次に死亡者数に関しても「旗」の主張を全面的に否定している。

「——当時の死亡者はどの位になると見えますか。以前取材した時は大体200名ラインだと見ました。このごろは2,000～3,000名というのが流行のように広まっています。200名程度だと言うと『御用記者』という非難を受ける有様です。実際、取材なさった方の見解はいかがですか。

——事実、一番神経を使ったのが死体の数でした。光州市内病院にある死体を一つ一つ調べましたが百体程度しか確かめられなかった。道庁の前で慰霊祭まで行なった数ですから確実だと断言できます。

——5年が経った今光州市民に会うと異口同音に2,000～3,000名位と言います。その根拠を尋ねると『50余名が某所に秘密埋葬された』とか『海に捨てた』というような話をします。全部『～といっている』という式の話です。確認されないウワサだけです。(略)

——実際2,000名ではなくて、明らかにされていない死亡者が数百人だけでもいたとしても問題はすでに起きているはずです。光州市内に明らかにされていない死亡者が2,000余名にもなるとすれば、各町内ごとにそのような人間が何人かずついなければなりません。隠そうにも隠すことはできません。また当時、光州には100余名の記者が入って取材を懸命にしたのに、そのうちだれもが2,000名説を支持するだけの材料を発見できなかったのです。」

少し引用が長くなったが、これで勝負はついたといえる。特記しておきたいことは、戒厳令下においても韓国マスコミはこれだけのことを明らかにできる位の取材を行なっていたということだ。そして、85年の段階でこの内容を活字化するということは、政権側と、反政府勢力・光州市民らの両方から攻撃されることが明白であった。実際、この座談会に出席している趙甲濟記者は後日情報部の取り調べを受け、取材メモを没収されているし、反対に反政府勢力側からもかなりの抗議を受け、同誌は不買運動の対象とさえなった。真実を明らかにするための勇気をも韓国マスコミは持っていたのだ。

1988年盧泰愚政権が発足して以来、光州事件に関するタブーが解かれ、マスコミは全斗煥政権批判キャンペーンの一環として同事件について多数報じた。また、盧大統領の諮問機関・民主和合推進委員会(民和委)や国会中に設置された光州事件に関する特別委員会<sup>(17)</sup>では、入手できるすべての資料(朝総連やキリスト者緊急会議など日本のものも含む)が公開され、戒厳軍側、デモ参加者、負傷者、遺族、そして全斗煥・前大統領までもを証言台に立てた調査が進んだ。

民和委の審議の中である委員は光州事件については「①全斗煥政権の執権者たちが自分たちが権力を取るために事件を造作したという『事前造作説』、②金大中氏が民主的手続では政権獲得が難しいので内乱を陰謀し、それに同調する者たちが起こしたという『金大中内乱陰謀説』、③戒厳軍が示威を過剰に鎮圧し

たために起きたという『過剰鎮圧説』の三つの視角が存在すると指摘した<sup>(16)</sup>。

②は全斗煥政権の基本的立場で、85年国防部が国会に提出した報告書は「一部の政治勢力の操縦を受けた暴徒たちの乱動」と公式規定していた。しかし、盧泰愚大統領は1987年6・29宣言を通じて金大中氏を赦免・復権させるとともに、光州市民の名誉回復と補償を公約した。「陰謀」の張本人の大統領選出馬が許されたのだから、盧大統領は②の視角を否定したわけだ。

88年4月盧政権は事件を「民主化のための努力」と規定し、光州市民の名誉を回復するとともに公式に謝罪した。その後、88年5～6月に改めて犠牲者の届出期間を設けた。「民主化人士」としての名誉と多額の補償の約束された届出受けつけであったにもかかわらず、死亡者として追加して申告したのは13人にしか過ぎなかった（行方不明者113人）。つまりここに到って「旗」が伝えた死者475人以上説は完全に否定されたのだ。

一方、学生や在野勢力などの反政府派の多くは現在までも①の立場を取り続け、「旗」が伝えるような虐殺があったと主張している。しかし政権側からの圧力が一切なくなった段階で、いくら調査が進められてもその証拠はまったく出てきていない。それどころか、たとえばデモを煽動したとして有罪となった全春心氏のような人も「戒厳軍が女性の乳房をえぐり出したというウワサはあったが、そのような遺体は見なかった。それは戒厳軍が女性の服を乱れた時、乳房が出てしまったのがまちがって伝えられたのだと思います」<sup>(17)</sup>との証言をしている。

また、①の立場に立つ反政府派の主張を大幅に引用紹介した月刊誌『新東亜』88年3月号でさえ「今までに戒厳軍が『妊婦の腹を裂いて胎児を取り出し道ばたに捨てた』という流言飛語はまったく根拠のないものと明らかになっている」と書いた。

そして決定的なのは、盧政権打倒を叫ぶ反政府派も、まったく「旗」を引用していない点である。

## おわりに

前節で見たように韓国で光州事件の真相解明の努力が進み、「旗」がまったく根拠のないでっち上げ文書であることが明らかになった。筆者はこれまで何回か雑誌寄稿を通じて「旗」を日本に発表し、デマを日本社会に広めて韓国と

韓国人の名誉を大きく傷つけた。キリスト者緊急会議、日本カトリック正義と平和協議会などの責任を問うてきた<sup>(19)</sup>。

しかし、現在に到るまでも訂正記事や反論はいつさいされていない。

筆者の周囲のあるノンクリスチ안의韓国専門家は、この間の経過を念頭において「キリスト者は目的のために嘘をつくことに対して宗教的良心の苛責がないのか」という質問をしてきた。

善意を持って行なった行動であってもその結果がすべて神の栄光を表すことにはならない。福音派の社会的責任への関わり方を考える際、考えなければならない問題は大きいといえるのだ。

## 注

(1) これは現在の時点で明らかになっていることを筆者がまとめたものである。

(2) 『キリスト教年鑑1990年版』には同会議の項に次のように記述されている。

「役員・代表中嶋正昭，実行委員大塩清之助，東海林勤，服部尚子，森岡巖，山口明子，設立・1974年。目的・韓国におけるキリスト者の民主化闘争に連帯し，支援行動を行う。またそのために日本の対韓政策を正す活動をする。これらの活動を国内的・国際的に他の市民団体や教会と連携しつつ推進する。市民集会，祈祷会等を行う。月刊『韓国通信』発行。」同会議は韓国の反政府活動家や光州事件被害者らに日本で集めた資金を送りつづけている。そのための特別会計を持つと機関紙に書いている。また，80年代中頃より，北朝鮮のキリスト教徒連盟との交流を進めているが，その二つのことの持つ政治的意味に関しても後日批判したいと考えている。

(3) 以下の引用は『韓国通信』第56号からのもの。

(4) 民団中央本部宣伝局編『「光州事態」の真相はなにか?』（民団），神谷康介『三一〇日の韓国と大統領金斗煥』（真世界社），柴田穂「続模索する韓国・光州暴動」（『サンケイ新聞』80年8月5～22日）

(5) 和田春樹（東大教授）が猪狩章編著『光州80年5月』（すずさわ書房）所収の座談会で行なった発言。同書231頁。

(6) 『月刊朝鮮資料』7月号（朝鮮問題研究所），『韓国1980年5月光州民衆の決起』（アジア太平洋資料センター），山本剛士『ドキュメント韓国は激動する』（教育社），民族統一新聞社編『死を賭けた韓国学生青春』（エール出版社），統一評論社編集部編『この民生かす統一よ来たれ』（創樹社），石井清司『ドキュメント金大中裁判』

(幸洋出版), 猪狩章編著『光州80年5月』(すずさわ書店)などが「旗」を引用または全文掲載している。

- (7) 学生運動の地下文献としては83年位から出回っていた。日本から逆輸入されたものと思われる。
- (8) 拙稿「日本の新聞が伝えた光州事件」(『朝鮮研究』80年8月号日本朝鮮研究所)
- (9) 拙稿「光州事件・『引き裂かれた旗』の真相は…」(『現代コリア』85年5月号現代コリア研究所) 42頁参照。
- (10) 80年5月25日光州発AFP=時事電(サンケイ5月26日夕刊)参照。
- (11) 朝日の斉藤特派員は、5月18日朝戒厳軍が学内ろう城していた学生を排除しようとしたのを止めようとして、全南大教授が重傷を負ったと書いた(朝日5月24日)。また、5月1日から26日まで光州にいた日本人技師宮川正則氏は、軍が無差別に市民を射殺するところを見たと言っている(毎日, 読売, 東京, サンケイ, 日経5月26日)。しかし、前者は19日に光州入りしている記者の18日の事件に関する断定であり、その根拠は示されていない。後者は、軍の市民への発砲を非常戒厳令が全国に拡大される前の17日などと語っており、信頼がおけない。
- (12) 前掲拙稿(『朝鮮研究』80年8月号) 7～8頁参照。
- (13) 死亡者の数に関する戒厳軍の発表は、5月21日午前7時現在で民間人1, 軍警5, 5月25日におよそ100, 5月31日に民間人144, 軍22, 警察4, 6月5日に民間人148(銃傷118, 打撲傷18, 刺傷9, 輪禍3)となっている。
- (14) 『韓国通信』56号, 80年6月20日発行。
- (15) 同91号, 83年7月20日発行。韓国の反政府勢力の間でも死者2,000人という数字が定説化していった。この根拠は、「旗」が23日に475体の遺体を確認しているのでその後の鎮圧作戦での死者と戒厳軍が持ち去った死者を加えると2,000人にはなるだろうという推算だ。
- (16) 『現代コリア』88年4月号18頁。
- (17) 5・18光州民主化運動真相調査特別委員会。
- (18) 前掲『現代コリア』88年4月号, 20頁。
- (19) 拙稿(『現代コリア』85年5月号), 拙稿「『韓国からの通信』『T・K生』は『北』の手先だったのか」(『諸君!』1988年7月号, 文芸春秋社) など。

[現代韓国・朝鮮論 専攻]